

南十字星

大阪大学外国語学部
(旧大阪外国語大学)
インドネシア語同窓会

2009年秋 第9号

発行 南十字星会

連絡先 大阪府池田市五月丘 2-5-113-402

電話 Fax 072-753-1693

Email rocky3@wombat.zaq.ne.jp

インドネシア語の海を漂って

粕谷 俊樹 ('62卒)



京都産業大学でインドネシア語を 36 年教えました。我ながらよく続いたものだと思うのですが、率直に言えば、大学の語学教師として合格点は取れませんでしたね。本欄では、長年、インドネシアにかかわった諸兄が、大いなる達成感を持って人生を振り返っておられるようですが、私の場合は、正直のところ、少なからぬ悔恨と反省が伴うのです。

*

京産大でインドネシア語を教えないか、と誘ってくださったのは、恩師松浦健二先生('51卒、外専27回)で、大阪外大から移られて間もないころでした。当時、商社に勤めていて、何の準備も覚悟もないままに「ま、やってみるか」と無謀にも手を挙げる気になったのは、ビジネスマンとしての能力に限界を感じていたことと、両親が教師でそれなりに親近感があったからです。同時に、外大の授業での印象で、昔の恩師たちには申し訳ないのですが「俺にもできるかも」と、言ってみれば実に不遜な考えを抱いていたのが最大の要因でしょうね。

でも、そのツケはすぐに来ました。'68年に京産大の講師として赴任したのですが、まあ、惨憺たるものでした。何年かの空白を経て、インドネシア語と取り組むのですから、冷や汗をかくことばかりでした。とにかく教えつつ学ぶといった日々の連続でしたが、ついには「現地で学び直す他に道はない」と悟って、苦心して学費を工面し、強引に私費留学でジョクジャへ行きました。松浦先生はもとより、同僚の先輩、

松岡邦夫先生('60卒)にもずい分迷惑をかけたもので

すが、それを省みる余裕もないほど、当時は必死でした。そして、ガジャマダ大学文学部で、私の担当教員となったブラドボ先生に面談すると、先生曰く「キミは、日本の大学で、(学んでいるのではなくて)本当に教えているんですよね?」。疑いの眼なんです。

これには、こたえました。海外からの研究者を受け入れて、経験十分な先生の目には、大学教員としてのあるべき実力に達していなかったのですね。

以後 30 有余年、私が頭に描く大学教員としてのあるべきイメージと己の実力とのギャップをいかにして埋めるかで悪戦苦闘し続けてきたようなものですが、その目的は、結局、達しえないままに終わってしまったというのが実感です。よくテレビの水泳放送で、泳者が架空の記録線を必死で追いかけている場面がありますね。あれを見ると、どこか我が人生に似ているようで苦笑してしまうのです。もっとも、私の場合は、ただインドネシア語の海を漂っていただけのような気もするのですが。

こうした凡庸なる教師生活の中で、恵まれていたのは、さまざまな分野の優れた人々に出会えたことですね。インドネシア関係に限っても、実に多くの魅力的な人たちと面識を得ることができました。そして、その中でも、私が心底からすごいと思ったのは、(大阪外大に縁がある人に限ったわけではありませんが)次のお2人ですね。



松浦氏の辞書(左)とアイブ氏の自伝

アイブ氏宅に教員が集った'82年。松浦氏(左)と松尾大氏('61卒)

1人は、前述の松浦健二先生です。優れたインドネシア教育者であったことは、勿論ですが(私語1つなき緊張感にあふれた授業を思い出される方



も多いでしょうが)その卓越したインドネシア語の運用能力、特に語彙力は、圧倒的です。『日本語インドネシア語辞典』(京都産業大学出版会)は、その集大成で、収められた語数、実に見出し語4万、文例8万。しかも、すべてを全くの独力で30年かかって成し遂げられたのですから、すごいです。辞書というものは、大抵は、底本をもとに、チームで編むのが普通ですから、まさに希有の偉業です。先生は、日頃から「生涯において、1つでもいいから本当に実のある仕事をすればいいのだ」と仰っていましたが、まさに身をもって示されたのです。こうした業績は、論文を重視するアカデミックな世界では、それほど評価されませんでしたし、また、特殊語のこともあって、その“すごさ”を知る人は限られています。しかし、不肖の弟子として、あえて言わせていただくならば「超一流の職人芸」だと思うのです。「膨大な原稿を宝物のように大切にしてくれた妻に感謝する」という序言の一節に先生の万感の思いが籠っているように思えます。

先生は、96年2月、司馬遼太郎氏逝去の1週間後に亡くなりましたが、まさに「大阪外大が生んだ2巨星墜つ」との感に打たれました。同辞書は、インドネシアでも盛んに売られています。同窓生諸氏には、使わなくとも、せめて座右に置いて眺めてほしいと思いますね。

*

もう1人は、長年、外大で教えられたアイブ・ロシディ氏です。日本では「アイブさん」の呼び方が似合う、気さくなお人柄ですが、インドネシア社会においては、文学者としてのみならず、さまざまな社会問題に対しても積極的に発言を続ける「論客」として知られています。'80年に国際交流基金の招きで来日した際、外大の森村蕃先生('63卒)に、「外大に招きたいんですけど、来てくれるでしょうかね」と相談を受けた時、まさか翌年、再来日して20年も教えるとは、予想だにしませんでした。彼



'05年、帰国後のアイブ氏と。新築の邸宅東屋で

は、スハルトの政敵として知られた元ジャカルタ市長、アリ・サディキンに兄事し、きわめて近い関係であったため、当時、政治的に難しい立場にあったことが、日本からの招聘を受け入れる決め手となったようです。でも、私たちににとっては、幸運でした。彼の仲介で、多くのインドネシアの作家、文化人、学者などとの交流が可能になり、日伊文化交流も促進されたと思います。インドネシア現代絵画展、詩朗詠大会などの開催も彼の功績です。

しかし、授業については、見方が分かれました。レベルが高すぎてついていけない学生には不評でした。京産大でも、そんな不満が出たので、私が「もう少し学生の力を考慮して教えほしいのだが…」と苦言を呈すると、意外にも「申し訳ない」と素直に謝られて驚いたことがあります。もっとも、若いころの短編に「生徒たちの前に立っている姿を想像するだけでぞっとする」と書いていますから、教師という職は、アキレス腱だったようです。皮肉にも父親は長年、小学校の先生でしたが。

文学者、学者、経営者(国内最大の文学出版社を経営)あるいは、政治家としても(アリ・サディキン政権が実現していたら、おそらく閣僚の一員だったでしょう)有能なアイブ氏は、実にエネルギーで、飾り気がなく、常に自然体です。インドネシアで、肩書や地位をひけらかしたりする、いわゆる著名人にも沢山会いましたが、彼は、まさに自由闊達、インドネシアの枠を超えた一級の文化人だと思います。彼の人となりを知るために「アイブ・ロシディ自伝」('08年刊)の日本語版を、

これまた、ぜひ座右に置いて、と宣伝したいところですが、老いたる翻訳家の仕事では、あと2-3年かかりそうですから、ちよいと無理ですね。

*

引退後も毎年2、3カ月は、寒さを避けてインドネシアで過ごします。妙なことに、今の方が、インドネシア語が流暢に話せる気がするんです。教師として、間違えてはならないという呪縛から解かれたせいなのでしょう。「もっと肩の力を抜いてやっていけば…」と今にして思うのですが、所詮は老いの繰り言というものです。

寄稿

Apa & siapa

15年を振り返って

平岡 毅 ('94 卒)

大学を卒業してから15年が経ちました。短くもあり、長くもあり、振り返ると色々な経験をしたものです。学生時代は陸上競技に打ち込んでいました。級友の半分くらいは早い時期に旅行や短期留学でインドネシアへ。私は結局、卒業旅行の時まで機会がありませんでした。しかしながら、結果的に同級生の中では最も早くインドネシア駐在になり、その後もどっぷりインドネシアと関わっていくことになるのです。

まず、卒業旅行です。卒業論文の試問を終えた翌日の2月23日から3月29日まで。卒業式にも出ず、入社式の直前までタイ マレーシア シンガポール バリ ジャワ 韓国と20万円ほどの予算で欲張りな日程に挑みました。シンガポールでは陸上部先輩の小西新平さん('64 卒)宅に泊めてもらい、奥様のおいしい手料理を御馳走になりました。

バリで3泊した後フェリーでジャワ島東端のバニユワンギに渡り、約3週間でジャワ島を東西にバスや電車を乗り継いでジャカルタまで移動。節約のため宿泊は

1泊3万ルピア以内、食費は1日1万ルピア程度に抑えていました。スマランではベッドと裸電球1つ、ロスメンの1番安い部屋。蚊の大群に攻められ、結局売店で他の泊り客と会話をして1夜を過ごしました。

ジョグジャカルタでは1年後輩の女子学生がお父さんと旅行しているのとはったり。一緒に屋台でミ・ゴレンをいただきました。広いインドネシアで、知り合いに出会うなんて…。すごい偶然に驚いたものです。

ジャワの旅行中は、野菜を多く使った料理で覚えやすかったこともあって、夕食はほとんどNasi Cap Cayばかりでした。ソロでは雨宿り代わりに入ったSATE JAMUという屋台で、出されたのは何と犬の肉のサテ。所々に不気味な毛も。旅行でいい印象が残っているのは、ジョグジャカルタの町の賑わい、プランバナンとジャワ原人の化石が発掘されたサンギランです。

次はジャカルタ駐在の話です。私が卒業後入社した

のは泰盛貿易という

東南アジア向けに機械類の輸出を主力事業とする専門商社でした。就職活動中の会社の説明通り、入社後1年未満で、正確には阪神大震災直後の1995年1月末に赴任し、それから約4年間のジャカルタ生活がスタートしました。現地密着型の営業スタイルを基本とする会社だったので、華人の顧客相手にインドネシア語で注文を取ってこなくてはなりません。いわゆるBetawiっぽく早口でしゃべる人もいて、まともに会話できるようになるには、丸2年はかかりました。道を覚えることも重要で、テリトリーであるKOTA地区に関しては、

裏道も含めてタクシー運転手に負けないくらい精通。ちょっとしたものだと思自負しています。GLODOKの機械工具屋街にもたびたび足を運び、価格調査や出張者のアテンドをしたものです。ここは機械工具類のパサールといった感じ。暗く、狭く、臭く、通路はごった返している。普通の日本人感覚では絶対に足を踏み入れたくないところですが、ここが当時のインドネシアの経済成長のためのツールや資材を供給していたわけです。

私のインドネシアとの関わりで、やはり外すことのできないのは、インドネシア人の妻を持っていることでしょう。縁あって2000年4月に結婚。5月から日本で暮らし始めた妻は、今では日本語はもちろんのこと、日本の家庭料理も上手に作ってくれます。社交的な性格もあって子供の幼稚園のお母さん連中とグループをつくり、仲良くやっているようです。時には夫婦喧嘩もしますが、何とか平和な家庭を維持しております。

最後になりますが、実は08年10月から2度目のジャカルタ駐在を始めていました。99年に泰盛貿易から転職し、日本アジア投資(株)のインドネシア現地法人の社長としての赴任でした。ところが、リーマン・ショック以降の世界的な金融危機の中で仕事にならず、わずか半年で帰国となりました(写真は08年11月、長男の作品展で家族と)。ジャカルタでは、清島さん、高岡さん、坂口さんらと10年振りに再会。感慨深かったです。

ロンボックの夕焼け
#08年12月





キャンパス便り

大阪大学
世界言語研究センター 講師 原 真由子
(外国語学部インドネシア語専攻担当教員)

'09 年度 1 学期を振り返って

4月に大阪大学外国語学部として2回目の新年度を迎え、あっという間に夏休みです。箕面キャンパスは夏の集中講義期間が8月初旬に終わると、あとは学生もまばら。しばらくは、やや閑散としています。1学期は、ゴールデンウィーク直後に、新型インフルエンザ感染抑制のために休講措置がとられるという変則的な出来事もありました。しかし、それ以外は大きな問題もなく学生たちは元気に学生生活を過ごしました。

1学期を振り返ってみると、まず4月1日に、新しい出会いに期待をふくらませた新1年生が入学してきました。インドネシア語専攻の新1年生は、日本語専攻の1人を含め全部で13人です。そのうち男子学生は3人。少ない人数ではありますが、皆仲良く団結力があるようです。

次に、7月11日に、旧外大の恒例行事であった夏祭りが箕面キャンパスで開催されました。インドネシア

夏祭りでは、民族衣装パフォーマンスにも参加して...



語専攻からは、1年生3人が民族衣装パフォーマンスに参加しました。世界各国の民族衣装を身につけ、数分間で歌・舞踊・寸劇などを上演するというコーナーです。参加した3人は、準備期間が短かったものの、自ら選んだインドネシアの音楽に合わせて、スダ舞踊やジャワ舞踊の衣装をアレンジして身につけ、自ら創作した振り付けで堂々と楽しそうに踊りました。どうやら入賞はできなかったようですが、普段は豊中キャンパスにいる1年生にとっては、箕面キャンパスでの外国語学部の学生主導の行事に参加できたことは刺激的な良い経験となったと思います。

オープンキャンパス

8月11日に、外国語学部のオープンキャンパスが箕面キャンパスで開催されました。台風の影響で来場者が少なくなることが心配されましたが、当日は天気が回復し、開始時間前からすでにたくさんの高校生と保護者で賑わっていました。オープンキャンパスでは、外国語学部概要説明、各専攻語のプレゼンテーション、就職講演会などが行われました。

今年度は基本的に各専攻のプレゼンテーションは1回45分間のみで、インドネシア語専攻への来場者は約40人ありました。具体的には、スライドを使って、インドネシア社会・文化の基本的な知識をクイズ形式で



受験生激励のこんな演技も

紹介し、さらにインドネシア語のミニレクソンを行いました。高校生たちは暑さによる疲れも見せず、日頃ほとんど触れ

たことのないインドネシアの情報やインドネシア語の解説に好奇心をもって耳をかたむけ、積極的に大きな声で発音練習にも参加していました。インドネシアを含め、1日でたくさんの地域の言語文化を知ることができる外国語学部のオープンキャンパスが、彼らにとって小さな異文化体験の機会となり、言語や文化・社会への興味・関心につながってくれればと願っています。

研究室の移動

大阪大学との統合後、旧外大教員の所属先がそれぞれ変化しましたが、研究室は移動せず、それまで通りでした。統合から2年が経ち、今後段階的に、所属先にしたがって、教員の研究室を移動することになりました。

インドネシア語専攻を担当している私たち教員4人は、箕面キャンパスのB棟5階に研究室が並んでいましたが、例に漏れず離れることとなります。

人間科学研究科に所属する旧外大の教員はA棟に研究室を置くことが決まり、同研究科所属の福岡先生はこの夏休みの間にA棟8階に移動します。国際公共政策研究科所属の松野先生は、'10年3月に豊中キャンパスに研究室を移る予定です。世界言語研究センターに所属する、外国人教師であるサフィトリ先生と原、そ



箕面キャンパスの中庭。真正面がB棟、㊦A棟。
㊦の建物は図書館

してインドネシア語専攻の共同研究室は今まで通りです。

すでに私たち教員は授業や会議、入試業務などで箕面・吹田・豊中の3つのキャンパスの間を行ったり来たりすること

が増えており、研究室が隣り合わせでもすれ違いになることがしばしばだったのですが、研究室の配置変化はますますその状況を助長してしまうかもしれないという不安があります。しかしながら、所属別に研究室をかためるのは所属先を同じくする教員同士のコミュニケーションを円滑にする上で大変良いことであり、日常の業務運営に不可欠なことです。

今後は、これまで以上に、インドネシア語専攻を担当する教員間で連絡をより密にとり、授業運営や学生への対応に支障がないように工夫していきたいと考えています。

研究活動の紹介

最後に、私自身の研究について少しご紹介します。私の主要な研究テーマは観光地として有名なバリの言語使用です。

バリ社会では、地方語であるバリ語を母語とし、さらに国語であるインドネシア語を話すことが出来るバリ人が大多数を占めています。そのような2言語話者であるバリ人同士の会話では、日常的に、頻繁にバリ語とインドネシア語の2言語の要素が混在している現象が起きています。バリ人の会話を

聞いていると、バリ語を話していると思ったら、いつの間にかインドネシア語に切り替わっていたり、1つの文の中でバリ語とインドネシア語の単語が両方使われていたりといったことがしょっちゅう起きているのです。現



バリ北部の村の会議。開会前に成功を祈念する

地調査にもとづき、そのような混在現象を詳細に記述しながら、なぜ、どのようなメカニズムで起きるのかという問題を明らかにすることが研究の目的です。地方語とインドネシア語の混在という現象は、バリだけでなく、

インドネシアの他の地方にも広く見られるもので、インドネシアの言語状況を理解する上で無視できないものです。

この研究テーマを含めバリの言語使用については、学生時代からいろんなアプローチから調査・考察してきており、その1部は一般向けの書籍(『多言語社会インドネシア』めこん'09年、『変わるバリ変わらないバリ』勉誠出版'09年)の中の1章として発表しました。

これまでは、調査対象は、バリ州都のデンパサールを含む、バリ語平地方言が話される地域としてきましたが、現在はさらにバリアガ地域と呼ばれるバリ語山地方言の地域にも拡張しつつあります。これからも、教員として教育を重視しながら、研究者としても調査の領域を広げながら言語研究に取り組み、授業にもその成果を反映できるよう努力していきたいと思ひます。



ブサキ寺院祭礼中の飾り付け

ジャカルタ発



空手の鍛錬と指導

清島 健朗 ('85 卒)

2004年1月、2度目の駐在としてインドネシアの地を踏んだ。冬の陰鬱なロンドンから夜半に到着。翌朝、小鳥のさえずり声と、惜しまぬ太陽の光が、8年の空白を埋め尽くしてくれた。成熟した個人主義の国では見られない笑顔と活気がそこにあった。ああ、戻ってきたぞという実感が体を漲らせた。

ところが、テレビをつけて、かつてとの違いに少々驚いた。旧正月前ということもあって、メガワティ大統領が「Gong xi Fat Cai」(恭喜發財=謹賀新年) と福建語で国民に語りかけてきた。大統領といえばスハルト、スハルトといえば中国語禁止と、ステレオタイプの認識していた自分のインドネシア像が、一気に崩れた。住居探しにまた驚いた。一戸建てが少なく、アパートがほとんど、嚴重なセキュリティーチェックがなされ、運転手も女中さんもパスがないと入れない。以前は、新しい入居者に向こうから「運転手を探してるでしょう」と売り込みに来たものだが、こちらから探さねばならない。これも時代の流れなんだなと思った。

今回、楽しみにしていたことがある。それは、ジャカルタ空手道部に復帰することだった。

空手道部というのは、ジャカルタジャパンクラブ(JJC)の個人部会に属する正式なクラブである。もともと1995年に、拓殖大学の空手道部OB

だった市原和雄さんと、社会人になってから始められた山口喜弘さんと小生の3人が発起人となって創設した。小学生から社会人まで幅広い会員で活動し、親子での参加者もあった。愛着もひとしおだったのだ。

小生は大阪外大を卒業後、オリックスという金融機関に勤めている。東京勤務時には、東外戦に来る後輩の受け入れをする程度で、道衣を着ることも少なかった。だが、インドネシアでは、何故か空手をやりたかった。日本にいとそ大切さが判らないが、インドネシアの生活に馴染むにつれ、日本的なものへの固執



空手道部の会員(筆者は後列⑤奥から2人目、中央に大村師範、⑥端が市原氏)

も頭を擡げた。これを理解するインドネシアの同士がいることがそれを後押しした。

空手道には諸流派があるが、最も体系的で国際的に展開していたのが松涛館流。日曜日の夕刻、プルタミナ本社にある現地の松涛館流空手クラブ(INKAI)に通ううちに、「日本人の松涛館流空手家をほかに知っている」と山口さんを紹介してもらったのがジャカルタジャパンクラブ空手道部創設の切っ掛けとなった。同好会発足として総領事に説明にあがったところ、「柔道」「剣道」があるのに「空手道」がないのはおかしいとまでサポートいただいた。

それで、当初から部として設立。最初はスナヤン競技場のPintu6というボクシングジムを間借りしての活動だったが、小学生から社会人、親子での参加もあり20人ほどの会員で、素人ながら新鮮で充実した内容

であった。当時は32歳で、妻と2人暮らし。妻はインドネシア大学のBIPAに通う傍ら、現地の婦人警官敷地内の柔道場で汗を流していた。

その後、2人の子に恵まれ、今回の駐在では04年4月に家族を呼び寄せた。息子が小学校2年生、娘が幼稚園年長組だった。

空手道場は、日本人クラブのあるスカイラインビル4階に、板張りの本格的なものとなっており、エアコンまで完備していた。参加者の殆どが駐在員とその子息であり、帰国とともに退部していくが、発起人の1人である市原さんが9年指揮を取り続けてくれていた。無級の白帯初心者が年に2度の審査会で「少しずつ色が変わっていくのが嬉しい」といいながら。

今度は自分も40代半ばで、少し衰えた技のキレを、気合でなんとか乗り越えていく。「まだまだ若いもんには負けられないぞ」といいながら。

本当は息子に参加させたかったが、板張り道場よりも畳がいいのか、家内と柔道場に通っている。そうすると、余計にひとさまの子供を大切に教えねばという使命感にかられる。

07年7月には日本空手協会の公式指導員、大村藤清師範を招いて、現地空手道愛好家との合同練習を行い、翌日の審査会では中学生で黒帯が誕生した。日本でも通用する公式認定つきだ。ジャカルタ発の日本チャンピオンになってもらい



道場（体育館）横の南葉樹の前で

たい。自分も学生時代にとった初段から26年間昇段しておらず、来年は2段を目指すつもりだ。実は家内も1昨年、この地で講道館の認定する柔道3段を取得している。少し意地になるが、取れるまでは帰国したくない。

ジャカルタ空手道部は15年目を迎えている。その間に、大統領は4度変わった。道場は現在、日本人学校の体育館に移り、毎年メンバーも少しずつ入れ替わりながら、常に20人はいる。帯の色はさまざま。白、黄、緑、紫、茶、そして黒帯。日曜日の朝、みんなが基本重視の鍛錬に汗を散らす。時代の流れとは一線を画して。

HP を開設しました!!

<http://bintangpari.jp>

南十字星会の Web サイトが今春スタートしました。いわゆるホームページ (HP) です。URL のドメインには、bintangpari (南十字星のインドネシア語) を使用しています。このドメインはもちろん、数多い世界中のサイトで唯一のものです。

パソコンで URL の書き込みに手数料がかかるようでしたら「南十字星会」で検索をかけていただくと、1番最初に出てくるはずですよ。“お気に入り”に入れてもらえると、次からは楽です。今後、HP はさらに内容の充実を目指しています。“交流広場”も設けており、ご活用・ご協力をお願いいたします。

詳しい説明は不要かと思えます。ただ、会報では初めての紹介となりますので、簡単に立ち上げの経緯と概要を説明いたします。

この南十字星会の会報が「会員だけでなく、一般にも読んでもらおう」という意見が会員内部から出たのがきっかけでした。このため、HP にはまず創刊以来の会報を PDF スタイルにして収録しました。左サイドバーの2番目の項目をクリックすると、手軽にご覧いただけます。

その下の「交流広場」は、意見や情報などのコーナーです。1件500字以内を原則にご投稿いただき、写真添付もお願いしています。



さらに「Belajar Bahasa Indonesia」のコーナーでは、ユニークなインドネシア語会話テキスト、民話などを紹介。勉強の手助けになるよう工夫し、編集部もともに学んでいます。リンクサイトも辞書や新聞、ビデオ映像に手軽にアクセスできるよう、各分野の代表的なものを選んで載せました。

右サイドバーには「インドネシアの歌」「インドネシアの地図」「インドネシアの大学」「インドネシアの諺」などの“おすすめコンテンツ”。

フロントページの題字の背景写真は、磯浦美恵子さん('58卒)のご協力を得ました。また、額縁に入れた形の「バリの朝焼け」は、彼女が3日ばかりで撮影したとのこと。クリックで拡大写真が出てきます。HPの“スタートに夜明けも合う”ということで、しばらくはこの写真の掲載を続ける予定です。

サザンクロス懇話会

第1回 6月にスタート



南十字星会は新しい取り組みとして 09 年から「サザンクロス懇話会」を企画、第1回を6月6日に開催しました。今後、年に2回程度実施していく予定です。会場は大阪大学中之島センターの9階会議室。ちょっとデラックスな雰囲気は好評でした。

大勢の人を集める公開講座ではなく、規模を絞って意見交換もできる“和やかな勉強会”を目指しています。初回のテーマは「インドネシアの政治と宗教」。母校・阪大の松野明久教授に講師をお願いしました。回を重ねながら、南十字星会らしい懇話会として発展させていくつもりです。講師は会員を加えた交代制にし、参加者は一般の人も歓迎しています。



今年は5年に1度のインドネシアの選挙の年。大統領選はユドヨノ大統領が再選を果たし、ブディオノ（元中銀総裁）副大統領のペアです。10月20日に2期目の就任宣誓を行うスケジュールが発表されています。懇話会の開催時は、総選挙を終えて、大統領選挙の前でした。松野教授のお話の中には

09年4月の総選挙結果

政党名	獲得議席	得票率	前回議席	得票率
民主党	150	20.85%	57	7.5%
ゴルカル党	107	14.45%	127	21.6%
闘争民主党	95	14.03%	109	18.5%
福祉正義党	57	7.88%	45	7.3%
国民信託党	43	6.01%	53	6.4%
開発統一党	37	5.32%	58	8.2%
民族覚醒党	27	4.94%	52	10.6%
ゲリンドラ党	26	4.46%	—	—
ハヌラ党	18	3.77%	—	—

5月9日の選挙委発表、議席数は同13日の再発表の数字

ユドヨノ人気と総選挙結果

ユドヨノは前回、1期目の大統領になったあと一時、人気が低迷しました。リーダーシップの欠如、優柔不断の形容詞も付けられたのですが、選挙を迎えて再浮上し「大統領は彼しかいない」というぐらい。彼の率いたPD（Partai Demokrat 民主党）の得票率は、今回の総選挙で1位。前回の7.5%から一気に20%台（20.85%）という大飛躍でした。

ユドヨノの優柔不断というのは、ある意味、今のインドネシア人の気風をよく表しているようです。多様な社会で、軋轢を少なく船を漕ぎ、経済だけはしっかりやりましょうという感じ。そして彼の人柄です。家族主義的な道德規範を示し、敬虔なイスラムのイメージと孝行息子のような人間像。そういうところが人気の要因だと感じています。

今回、議席を取った政党は全部で9つ。得票の上位3党はPD、Golkar（Partai Golongan Karya ゴルカル党）、PDIP（Partai Demokrasi Indonesia Perjuangan 闘争民主党）の順。いずれもイスラムを掲げない、世俗的な、民族主義グループです。Gerindra（Partai Grakan Indonesia Raya ゲリンドラ党）とHanura（Partai Hati Nurani Rakyat ハヌラ党）は新たに議席を獲得した民族主義政党です。つまり、民族主義グループの方が圧倒的に強かった、という結果でした。PDが増やした分、他党がちょっとずつ削れています。PDについては、5年間「中庸」のユドヨノ政治を見ていて、安心感につながったと見られます。

イスラム政党の得票は...

今回の総選挙で注目のひとつは、イスラム政党が躍進するかどうかでした。イスラム系政党はPKS（Partai Keadilan Sejahtera 福祉正義党）、PAN（Partai Amanat Nasional 国民信託党）、PPP（Partai Persatuan Pembangunan=ペー・ティガ、開発統一党）それとPKB（Partai Kebangkitan Bangsa 民族覚醒党）の4党です。PKSは得票率が微増だった割には、選挙制度のせいで議席数を大きく伸ばしました。あとの3党は軒並みダウン。得票率合計でも4党で前回32.5%だったのが、24.15%です。

さらに、今回は全国得票率で2.5%を獲得できない政党は「議席なし」という法律が適用されました。このためイスラム系のうちPBB（Partai Bulan Bintang 月星党）とPBR（Partai Bintang Reformasi 改革の星党）は前回各11、14議席あったのが、今回は2.5%に達せず「0」議席なのです。新しい政権ではあまりイスラム色を出さないようになるのではないかと思います。

寄稿

Apa & siapa

アユ・ウタミと縁あって 話題作『サマン』の翻訳

竹下 愛 ('92卒)

私が外大のインドネシア語学科に入学したのは1988年です。中学生の時に参加したホームステイプログラムの滞在先がジョクジャカルタで、この国の人々や暮らしについてもっと知りたい、と突き動かされたのがきっかけでした。

92年に学部を卒業してからは、そのまま大学院に進学。翌春、学部時代に所属していた「落研」の先輩と学生結婚をして、新居のあった横浜から週1度の新幹線通学を開始。その後は1年余りの間インドネシア大学に単身留学をするなど、改めて思い返してみるとずいぶん強引なやりかたで初志貫徹(?)してきました。

夫が転勤族であったため、ひとつ場所に腰を据えて何かに取り組むのは困難でした。とりあえずジャカルタと母校のある大阪を足場として、国内のどこに住んでい

もなんとか自分の研究やインドネシアとのかかわりを維持していられるよう努めていました。



ジャカルタの紀伊国屋書店で

しばらくのブランクを経て、外大に新たにできた博士後期課程に進学。昨年9月に満期退学となりました。現在は夫の職場も固定となったため横浜に定住を決め、大学でインドネシア語の非常勤講師をしたり、通訳や翻訳の仕事しながら、新秩序期インドネシアの若者向け雑誌に関する博士論文の完成を目指しがんばっています。

2年ほど前にはポスト・スハルト期のインドネシア文学の新たな潮流をつくったといわれる『サマン』という小説を翻訳・出版する機会に恵まれました。97年に出版されたこの小説は、スハルト体制崩壊直前というひとつの時代の「終わりの始まり」をリアルタイムで描いた物語です。自由化やグローバル化の波の中、人々の価値観にも急速な変容がもたらされ、民主化を求める声も日増しに高まっていました。そんなインドネシア社会を舞台に、抑圧的な社会規範や当局の暴力に傷つきながら、

『サマン』の原書と翻訳本
はアユ・ウタミと並んで



それぞれの自由を求めて立ち上がり、せめぎあう人々を描いた群像劇です。

私がこの小説と出会ったのは、スハルト退陣が間近な98年の4月、ある調査プログラムのメンバーとしてジャカルタに滞在していた頃でした。人権運動家の友人から手渡されたこの本は作者アユ・ウタミの自筆サイン入りでした。最初の数ページでショックを受けて引き込まれ、1晩で1冊を読み切ってしまいました。

その後、縁あって作者のアユ・ウタミとも頻りに会うようになりました。生まれ年が同じで、誕生日も2週間しか変わらず、すっかり意気投合。私が手にした『サマン』の本に入っていたのは、彼女の第1号サインであったと分かり、2人で大仰天したこともありました。不思議なめぐり合わせです。すでに数カ国語に翻訳されていたこの小説の日本語訳を、私がお引受けする運びに。そして、こだわりの編集者との気の遠くなるほどのやり取り。その甲斐あってようやく出版にこぎつけたのです。

最近ジャカルタに行くたび、アユの自宅の庭で、彼女のパートナーであるカメラマンのエリック氏お手製のピザをつまみ、昼間からビールを飲むのがもっばらの楽しみです。08年に新作の『ピランガン・フー』という小説でインドネシアの直木賞ともいべきカトゥリスティワ文学賞を受賞し、すっかり大御所文化人になったアユですが、私にとっては今でも、本音でなんでも話せるファンキーな友人でいてくれることにとても感謝しています。

8月に現大阪大外国語学部でインドネシア文化の集中講義をさせていただく機



集中講義後、学生らに囲まれて

会がありました。外大から阪大に名称は変わっても、雰囲気は昔のまま。懐かしさに胸がいっぱいになりました。やる気あふれる後輩たちと接し、私もたくさんのパワーをもらいました。10年1月に予定されている2学期の集中講義がとても楽しみです。

寄稿

Apa & siapa

...そして、今、市議に

須田 和 (旧姓・坂元 '79 卒)

1975年、広島の高専からインドネシア語学科に入学。初日に「女子には就職口は少なく、教職課程をとっておいた方がいい」と聞かされました。南国との貿易の仕事を目指していたので、愕然としたものです。事実「四大卒女子・地方出身者」にとって、当時就職は厳しい状況でした。

それでも大阪・中之島の商社に入社。3年後にインドネシアと取引のある会社に転職。84年、日本生まれインドネシア国籍の男性と結婚して2児を出産。96年に公共施設(女性センター)で働き始めました。99年に離婚と転職。2004年に民営化された尼崎市女性センターの初代民間人所长となりました。

私は現在、兵庫県尼崎市議会議員です。6月7日の選挙で無所属・新人、団体推薦もなく立候補し、3434票を得て、立候補者59人・定数44人の20位で当選しました。

「政治」は1度たりとも自分の目標になったことはありませんでした。応援してくれる大勢の仲間たちに支えられ、現職の白井文市長(79年外大仏語科に入学後、全日空の客室乗務員になり、退学されています)や女性の県議・市議の力強い応援もあり、一大決意をしたのです。

「資金」「人」「時間」の全てが足りないまま、2カ月の準備と1週間の選挙戦。街頭演説、街宣車で名前やメッセージの連呼と手振りなど、努力しました。最終日まで楽観できる状況ではありませんでしたが、前向きで笑顔の多い選挙事務所でした。控えめにお知らせした外大の恩師、先輩のカンパやエールにどれほど励まされたでしょう。心から感謝申し上げます。

「子育てにやさしいまち」「誰もが大切にされ認め合えるまち」「市民の力と経験がいきるまち」のために、「白井市長と共に開かれたクリーン市政をしがらみの



今年には幸運の年。6月8日の神戸新聞朝刊には万歳写真も。④は初孫

ない立場ですめる」ことを強調しました。市職員を威圧し、要求ばかりする議員ではなく、「対立より対話」をし「要求よりも提案する」議員になりたいと訴えました。スーパー前では「1円でも安く、安全でおいしいものを選んで買い物されているように、市の財政も考えませんか」。通勤時間の駅前では「職場としての尼崎、暮らす町としての尼崎、もっと居心地のよいものになるように、ワークライフバランスを」と。

民営化された女性センターでは、大幅に削減された予算で事業内容や施設管理を充実させ、その実績は自信にもなっています。今度は、市民に期間限定で雇われる議員とし



選挙の街宣活動。車の運転は息子も応援で。④は白井市長と

て、みなさんのために働けるチャンスをと、懸命に訴えました。

専業主婦として子育て支援や町のバリアフリーの活動。そして、男女共同参画社会づくりという国策を実現する女性センター3カ所で勤務したことが、今後の市議の仕事に大きく役立つと思っています。

これらは外大時代の学びや経験のおかげです。言葉や文化、価値観が異なっても理解し合う努力をすれば、必ず成果が出ます。出会った恩師や同級生・留学生とは性別・国籍・年齢・宗教などに関わりなく、対等にコミュニケーションがとれたことも貴重な経験で、私の未来を拓いてくれたのです。外大で学んでよかったと今、改めて思います。

私生活では、息子は商社に就職してジャカルタ勤務、娘はこの7月に母親になりました。

多くの方の期待を仕事でお返すようがんばります。南十字星会のみなさま、どうぞ応援してください。

(Web サイト <http://www.ac.auone-net.jp/~suda/>)

関東支部懇親会

7月11日に東京・神田の学士会館で開催。午後3時半から2時間半がアツと言う間でした。

1944年卒の市村、東郷両先輩をはじめ2008年卒まで34名の幅広い年齢層の出席者と母校大阪大学の松野教授、本部から山口会長、岩谷広報担当をまじえ和やかに。「歴史と熱気」を感じました。スピーチに続いて会食、歓談。女子留学生2人がジャワの伝統舞踊を披露し、拍手喝さいでした。

会場からさらに2次会に繰り出して旧交を温めた方々も多かったようです。

今年3月から、渡邊悠三(69卒)が支部長を引き継いでおります。転勤や転宅で住所が変わられたさいは、ぜひご一報ください。(渡邊)

懐かしい仲間



消息

ひとこと (敬称略)

池永義啓(41卒)=札幌市南区

我々の戦争体験とは一味違った三宅勇君のご苦勞話に驚嘆したり、童顔しか思い浮かばない八百修君の死を悼むことが出来たのも、この会報のおかげと深く感謝しています。

東郷芳温(44卒)=東京都千代田区

入試競争率23倍でした。同期蒙古語に司馬遼太郎、露語教授・山口慶四郎君がいました。

板坂勇夫(47卒)=東京都杉並区

春から夏にかけてインドネシアは総選挙、大統領選で沸き立ちました。このため、私の日本インドネシア協会の情報収集の仕事も多忙を極めました。

原 勝利(50卒)=千葉県佐倉市

仕事の傍ら家内の介護。両方で忙しくやっております。

小原義男(53卒)=名古屋市中村区

会報を楽しみにしています。尺八演奏会と後進指導に多忙ですが、インドネシア語も忘れぬよう辞書をのぞいております。

中村英男(58卒)=大阪府吹田市

08年7月、阪大付属病院に生まれて初めて入院、大動脈瘤切除手術を受けました。お陰様でその後何の支障もなく、順調のようです。ご配慮有難うございました。

濱野美智夫(60卒)=東京都大田区

平成17年2月に完全に引退し、気ままにやっております。スポーツを楽しんでおります。

石川恵二(62卒)=横浜市緑区

第2の故郷横浜市で、昨年はアフリカ開発会議。今年は横浜開港150周年や世界卓球選手権大会。来年はAPEC会議、そのボランティア活動とともに東京の会社にも通勤しています。朝の満員電車で苦痛を感じ始めたので、今年限りで会社は辞める考えです。

堀田 実(63卒)=千葉県舟橋市

昨年、家内に先立たれ一時不調をかこっていました。ようやく体力、気力とも元に戻り元気にやっています。月に3回料理を習い、これもなかなか楽しいものです。

前田比佐夫(63卒)=岡山市

会報を初めて受領。同窓生の活動を興味深く拝読しました。

辻 修司(64卒)=京都市東山区

07年6月末、サカタインクス(株)退職。現在、タイ・バンコック在。時々(年2~3回)京都の自宅に戻っています。

藤野龍雄(64卒)=大阪市淀川区

元気で週3日出勤の現役を続けています。お客さんがある限りですが...

扇谷竹美(66卒)=在ジャカルタ

まだ暫くはインドネシアでの生活が続くようです。日本での集いに無沙汰となりますが、お許しください。

宮下憲一郎(67卒)=東京都目黒区

週1回、カルチャースクールでCNNニュースのVideoを見ながらヒアリングと会話力維持に努めています。

松本雅子(80卒)=千葉県沼南町

08年に30年ぶりにポロブドゥールへ。30年前はまだ周りにジャングルがいっぱいあったように思うのに、広くきれいに整備され、公園になっていました。プランバナも地震で無残な部分もありましたが、見違えるよう。今回、遺跡の見事に改めて驚きました。

高須加奈子(83卒)=さいたま市

大学受験の息子を抱えており、土曜日も学校と塾。私も夜は遅くなり、朝は早起きです。でも替わってやれませんか(息子も替わってほしいとは言いませんが)、せめてこの1年、食事だけはきちんと用意してやりたいと...

中川有喜子(95卒)=東京都渋谷区

トラックかバスを購入する際には、ぜひご連絡をお願いします。三菱ふそうトラック・バス株式会社勤務です。

佐藤勇貴(04卒)=東京都世田谷区

インドネシアに発電所をつくる仕事に携わっており、ジャワ、スラウェシに行く機会がたまにあります。プライベートは2歳前の双子の娘に囲まれ、てんてこ舞いの日々を送っています。

大橋 潤(05卒)=大阪府豊中市

大阪で人材開発の営業・インストラクターをしています。

おくやみ申し上げます

荒木二郎(42卒)

=兵庫県姫路市 09年1月死去

朝日三郎(45卒)

=兵庫県明石市 05年1月死去

鈴木 丘(57卒)

=大阪府堺市 09年5月死去